

『健康・機能性食品開発』研究会

設立主旨

近未来の超高齢化社会においては、優れた機能性食品の開発が更に重要になる。そのため、健康維持・増進に関わる各産業・医療・福祉等広い分野に跨る良好なパートナーシップを築くことを目的とする。

17年度の活動内容

17年度は会長が新たな研究開発テーマの提案と実施を企画するために、必要な情報を共有することを目的とした。そこで、亡山な発想による機能性食品の研究開発テーマおよび既存の機能性食品や臨床診断薬等を正しく理解するため、それらの研究開発で活躍されている大学や企業の著名な研究者による講演会を4回、中部生物工学会技術セミナーとの共有による講演会を1回開催した。また、会員相互の親睦・理解を深めるため、講演会終了後に講演者ならびに会員相互の自由な情報交換会を行った。



＜研究会 風景＞

18年度の活動目標

- ・17年度に引き続き、大学等の公的研究機関および先進企業の研究者を招き、健康・機能性食品の有効性および安全性に関する最新の情報を提供する。
- ・行政機関の担当官を招き、健康・機能性食品開発における国内外の情勢、新特定保健用食品（新トクホ）制度等に関する情報を提供する。
- ・研究会参加企業のニーズ、シーズを把握し、産学連携を推進するとともに、いくつかの分科会を発足させ、特定保健用食品あるいは健康・機能性食品の開発に向けた産官学連携を推進する。

参加メンバーの声

この研究会には全て参加させて頂いております。毎回、機能性食品開発分野で活躍されている、大学や企業の著名な研究者の講演を聴講させて頂きました。我社は特定機能性食品の開発に力を注いでおり、講演内容は元より、講演者や参加者との交流が研究開発に大変参考になっております。我社の研究員にとっても良い刺激を受ける機会となっております。今後も研究会の活発な活動を期待しております。



日本オリゴ株式会社
代表取締役
藤井 孝一氏

世話役教員の声

17年度の活動内容は主として勉強会あるいはシンポジウムの開催による情報提供でしたが、質、量ともに満足いく内容であったと自負しております。また、研究会の会員企業と県立大学との共同研究も進行しており、製品化につながったものもあります。18年度はさらに充実した活動により、富田ブランドの機能性食品を開発したいと思っています。



生物工学科
＜榎教授＞



生物工学科
＜中島教授＞

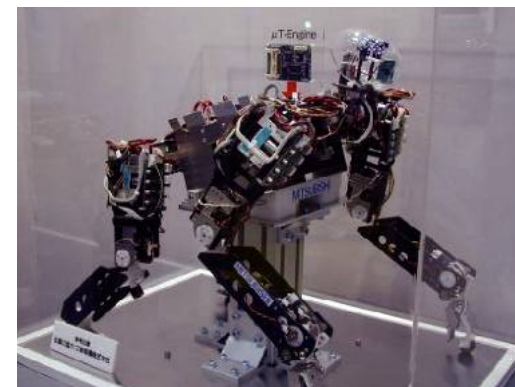
『ヒューマンインタフェース ロボット開発』研究会

設立主旨

人間の生活空間での共存、人間の作業領域での協働をコンセプトに、人とのインタラクションやコミュニケーションに役立つ人間支援、作業支援、生活支援型ロボットの開発に期待が集まっている。本研究会は各样センサーや駆動・移動技術など、感覚制御と運動制御およびこれらを統合する知能情報処理技術やロボットの未来について議論しヒューマンフレンドリーな人間支援、作業支援、生活支援型ロボットの開発を目指す。

研究会の運営

1. 基盤技術や横断型技術分野で活躍する技術者・研究者による講演会
2. 既存の各種ロボットやヒューマンインタフェースを理解するための勉強・意見交換会（平成17年度は5回開催）
3. ヒューマンフレンドリーな人間支援、作業支援、生活支援をキーワードに幅広い分野の会員相互の自由な情報交換会
4. 最先端で夢のある次世代ロボットとそれを実現する科学・テクノロジーを実現するための企画会議
5. その他世話人が必要とする行事



7/19 三菱電機株式会社・加瀬隆明氏による
＜「ヒューマンインタフェースロボットMaple」＞

18年度の活動目標

1. ヒューマンフレンドリーな人間支援、作業支援、生活支援型ロボットの開発に携わる技術者・研究者による講演会
2. ヒューマンインタフェースとロボットに関する本学特任教授および新任教員による講演会および意見交換会
3. とやまロボット開発研究会との連携によるシンポジウムなど
4. 県内ロボット関連企業の見学会および意見交換会
5. 世話役教員の所属講座の研究成果報告



2/8神戸大学・塚本昌彦氏による
＜「ユビキタスコンピューティングとビジネスチャンス」＞

世話役教員の声

講演会などへは毎回多数の皆様のご参加を頂き、評価に議論していただきましたことは、次世代ロボットへの関心の高さが覗われます。皆様とロボットを中心として様々な課題を議論することで、新たな方向性を探り、新たな技術を創出する会に発展させていきたいと思ひます。



＜大島教授＞



＜中村教授＞

参加メンバーの声

ロボットに興味があつて参加しましたが、会社の事業との関係が問題です。ロボット開発には、制御工学のみならず、あらゆる分野が必要で、人とのインタフェースとなると安全性はもちろん、心理学から文化、歴史までも研究対象です。研究は細分化されがちですが、企業で研究成果を応用するとき、総合工学ともいえる課題に触れることは、応用の幅を大きくし画期的な新製品を生み出す上で、非常に効果的なことだと思います。



三協アルミニウム工業株式会社
沖 善成 氏